



### 次回例会のご案内

是非ご出席ください！ 課題を共有しませんか？

日時 ▶ 10月4日(月) 午後7時~9時

会場 ▶ 愛宕町教会

奨励 ▶ 荒又敏徳 牧師 (愛宕町教会担任牧師)

発題 ▶ 「平和を実現する人は幸いである」- YWCAの活動について-  
山本貴美子 姉 (甲府YWCA会長・南甲府教会員)

3ページより続き

喜びになり、生きる力になるか。そしてそれがどれほど大きな他者との関わりに置いて責任を果たす力を生み出すか。それを信じて、山梨英和というキリストの学校は、お互いを認め、理解し合い、成長できる場所であることを教職員が絶えず確認し、一人一人の繋がりを大切に、人と関わり、自分を見つめ、与えられた課題を誠実に引き受ける人を育てる所となって行きたく存じます。

そのための教育活動の土台として毎日の礼拝に臨み、一日一日を積み重ねています。礼拝を大切に作る姿勢が、生徒にも教職員にも強くあることを私は感謝しています。短いですが、心の込もった礼拝によって、私達は、なぜ学ぶのか、何のために、何を目指し、どのように生きるのかがいつも確認されています。そこから勉強するエネルギーが沸き起こってきます。更に願う事は、それが毎日の生活の中での血となり、肉となり、実践となることです。礼拝という特別な経験は、生徒にとって、また教職員にとって、他者からの語りかけを聴き取り、語られる事柄を深く思い巡らす力が養われる時です。自分の言葉で表現し、讃美の歌を歌い、祈る事によって慰めが与えられ、希望が沸いてきます。礼拝が心の習慣となる時、私達は毎日の中で直面する難しい課題や厳しい出来事に正面から立ち向かえる者になると信じます。

生徒はこのように毎日を過ごす中で成長します。身体的にも精神的にも変化の激しい中学高校の時期に、聖書という、人生の羅針盤と出会い、礼拝によって心を静めて物事を深く考え、自分の言葉を織りなす経験は、本当に大きな力となります。今の若者は自分を余り肯定的に見られないそうです。その自信のなさが逆に自分さえよければ他はいつでも構わないという、無関心や傲慢さと隣り合わせています。一見両極端に思える姿ですが、これは心の奥底、魂の深みで自分自身がしっかりと支えられ、自分の存在が喜ばれているという確信とそこから来る平安がないからだと思います。

こうした現実には晒されている思春期の子供達が、自分の存在が喜ばれている事を知り、そして自分を支えるものと出会い、それを自分の言葉で生きられるのはとても大切なことです。こうした道筋を通して他の人達と出会う経験が社会性を育て、人を生かす深い知恵や思いやりを生み出すと信じます。「辛い時に聖書の言葉があり祈れると言うことが、また讃美の歌を歌えるという事がどんなに大きな慰めとなったかしれない」と卒業生はよく言ってくれることは、何より嬉しい事です。このように言える人はきっと他の人の辛さや悲しみにも寄り添える優しい人でありましょう。このような人を育てる学校でありたいと私達は願います。

山梨英和のような学校をミッションスクールと呼ぶ事があります。最近では、ミッションスクールと呼ぶより、キリスト教学校とかキリスト教主義学校と呼ぶ事が一般的ですが、ミッションに込められている「使命」という意味を再確認する意味で、あえてミッションスクールと呼ぶ時があります。私達一人一人はそれぞれ神様から大切な使命を与えられてこの世に生まれてきたとキリスト教では考えるからです。その使命は何か。それを探求するのがキリスト教学校です。山梨英和という学校はその姿勢を教師も生徒も職員も大切にしたいと願っています。様々なことが激しく揺れ動き、不安が募るこの時代にあればこそ、永遠に変わることのない真理に支えられ、人として、学校として、謙虚にしかし全力でお応えしたいと願っています。

しかし、繰り返しになってしまいますが、それが上手く伝えられず、生徒募集に苦しみ、時に生徒指導に難渋する時があることが、目下の課題です。けれども、それは、学校として避けて通れないものであるのかもしれない。もし、そうならば、私達は、その問題の前に謙虚に身を置いて、心ある方々との出会いや言葉の中から、問題解決のヒントを探りたいと思います。今日の集いがそのような場所の一つとなることを心より願います。

編集後記

☆遅くなりましたが、会報第6号をお送りいたします。今回は英和学院を取り上げました。「ミッションスクール、それはミッション=使命、私たち一人一人が神様から大切な使命を与えられてこの世に生まれてきた。そのことを生徒さんに全力で指導している」との力づよい大木先生の言葉に感動でした。社会において、教会において、大きな影響力を与えてきた英和のために祈り支えていきたい。(清藤記)



Tomosibi

# 灯

山梨県キリスト教連絡会

2009年10月設立 代表:小島章弘

事務所 ▶ 〒400-0024 甲府市北口3-4-23 日本基督教団 愛宕町教会内 Tel 055-253-3150

NEWS LETTER NO.6

## 奨励：大木正人 牧師 (聖書：ルカによる福音書 第2章41節～52節)

ルカによる福音書2:41～52は、イエス・キリストの少年時代を語る唯一の聖書の箇所です。ユダヤでは男の子は13歳(パルミツバ)で、女の子は12歳(パットミツバ)で成人を迎えます。その一年前の12歳の時、イエス様の両親はユダヤの人々にとって一番大事な祭を祝うために家族でエルサレム神殿に巡礼しました。過越祭と呼ばれるその祭りには各地から15万人もの人々が訪れたそうです。人々は地域毎にグループを作り、一番前を子供達、その後ろを女性達、一番後ろを男達がまとまって歩きました。そしてエルサレムで一週間に及ぶ祭りを祝い、それが終わると、来た時と同じグループを作って帰りました。

イエス様の両親は過ぎ越し祭が終わり、エルサレムから一日分の道をナザレに向けて歩き、今晚はここで泊まるという時になって初めてイエスがいない事に気づきます。それまで気づかなかったのは、息子は親と少し離れて歩いていた事や、小さな弟や妹の方に気を取られていたのかもしれない。それにイエスも来年は成人ですから、まさかとはぐれてしまうとは夢にも思わなかったのでありましょう。

息子がいないと知って両親はすぐに探し始めます。祭りから帰ってくる人波みをかき分け、声を囁らして彼らは必死にイエスを探します。何の手がかりも得られず、見つからないまま丸2日が過ぎます。悲しみや不安、拭いきれない後悔に胸が張り裂けそうになりながら、彼らはエルサレムにたどり着いたことでしょう。

ところが、神殿に入ると、両親は「イエスが、神殿の境内で学者達の真中に座り、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけ」ます。「見つけた」という言葉には探していた子がここにいた！という喜びが溢れています。探していた者をついに見つけ出した時の喜びは何にも代え難いものです。ましてやそれが子供であれば喜びは一入であったことでしょう。

この時「両親はイエスを見て驚」いたとあります。他の人達はイエスが学者達と堂々と渡っている賢さに驚きましたが、両親は子供が神殿に居残って、学者達とのやり取りに夢中になっている事に驚きます。母親のマリアは言います。「子よ、なぜ、こんな事をしたのですか。見なさい。あなたのお父さんも私も心配して、あなたを探していたのです。」

これは3日間子供を必死に探し回った母親としては当然の言葉でしょう。「心配して」と訳されている言葉には、「もだえ苦しむ」(16:24)とか「非常に悲しむ」(使20:38)という意味があります。子を思う親の気持ちの痛いほどこの一言には込められています。それなのにイエスは、「どうして私を探したのですか。私が自分の父の家にいるのは当たり前だ」という事を、知らなかったのですか」と答えます。何と生意気な言葉でしょうか。家族から離れて勝手に神殿に居残ったのはイエスの方です。それを叱られてこのように言い返してくるのです。ここでの少年イエスの言葉や振る舞いは私達をとて戸惑わせます。

この箇所を読む時、私はいくつか考えさせられることがあります。ひとつは子供の思いと大人の思い、あるいは親の思いとのギャップということです。「少年イエスは…残っておられたが両親はそれに気づかなかった。道連れの中にあるものと思い先に行ってしま」った。その結果両親は子供を見失います。大人への入口に立つ12歳の少年を見失う両親。これはとても象徴的な出来事です。ここには私達、大人が、教師が、親が犯しやすい思い込みや独断といった過ちに対する警告、あるいは子供の気持ちを置き去りにしたまま前に進もうとしている者達への注意が記されているように思えます。少年は自分が大切にしたい事に、とことんこだわり、そこに留まるのですが、両親はそれに気づきません。彼を置き去りにしている事に気づかないまま、自分達のペースで先を急いでどんどん行ってしまいます。自分にとって大切な事に固着し続ける少年と、予定が済んだらさっさと次に進んでしまう大人達。この対照的な姿を通して、神様は私達にしっかりと子供の心に寄り添い、思いを馳せる事の大切さ、難しさを示しておられるのかもしれない。

次に思うのが、学ぶ事の楽しさが一人の少年を引きつけてやまなかったということ。少年イエスは神殿の境内で学者達の真ん中に座り、話を聞いたり質問しています。それは家族の事や時間を忘れさせるくらい少年を熱中させるワクワクする経験でした。その道の専門家である教師と学ぶ楽しさに少年は心奪われたのです。「話を聞いたり質問したり」して学び合う喜びが、一人の少年をして家族や友達とは違う新しい喜びに目覚めさせます。新しい事をつつまた一つと学び知る事で、少年の世界が広がり、瞳は輝き、未来が切り開かれて行きます。だから少年はその場を離れる事ができなかったのでしょうか。教育とは本来そうした喜び溢れる出来事なのだと思えます。親離れの自立を得させる貴重な一歩でもあるのです。

★

このことは、私達に委ねられている務めの光栄と重さを教えます。私達はこの山梨英和というキリストの学校という「境内」で、授業はもとより様々な場面で、イエス・キリストがこの学校へとお招きになった子供達と共に学ぶ歩みを重ねます。

しかし自らを振り返る時、たくさんの弱さや破れがあり、また、思い込みや独断といった過ちをさへ犯す者でしかない自分に、はたして、その任に堪えられるであろうかと不安は募ります。しかし、私達は、神様によって呼び集められて、ここで光栄ある喜ばしい教育という使命に就かせていただいています。このことに畏れと感謝を抱き、祈りをもって、謙虚に、ただひたすらに神様の導きとお力を信じて、祈りをもって進むほかありません。このことを心にしっかりと刻みながら、「知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛される」子供達、生徒達と出会い、共に学び合う者となる幸いに感謝をします。

私達の先頭に立ち、真ん中におられ、またしんがりを務めて下さるイエス・キリストの助けを信じて私達は歩みます。

## 第6回例会 発題報告

## 山梨英和の昨日・今日・明日

大木 正人氏 (山梨英和中学校教頭・宗教主任)



今日は山梨英和中学高校の事について、宗教主任の立場からお話させていただきます。今日の話はあくまでも山梨英和の中学高校に限定したものとさせていただきます。まずご理解いただきたく存じます。

さて今日の進め方ですが、まず始めに山梨英和中学高校のアウトラインについて、昨年、創立120周年の記念に創りましたDVDによってご覧いただこうと思います。その後で私が考えていることについてお話させていただき、残る時間で、皆さんからの質問をお受けし、それに答える事で私の話の不足を補いたいと思います。

…「山梨英和120年の歩み」上映…

ご覧いただいて、おおよその事はお分かりいただけたかと思えます。ここで示されたことを大事にしながら進んで行きたいと思っています。これを踏まえながら、以下、少しお話をさせていただきます。

山梨英和中学高校の伝統行事に「花の日」があります。毎年、創立記念日に行っている行事です。これは第3代、第5代の校長を務められたミス・プレストンの頃に始められたそうです。プレストン先生は最初、東京の東洋英和で教え、その後山梨英和にいられて、1894年に第3代の校長になりました。先生が校長になられた1894年は、日本が朝鮮の支配をめぐって日清戦争を始めた年です。その10年後には日露戦争が起こされます。その意味ではプレストン先生が校長になられた1894年はその後半世紀余り続く日本の帝国主義侵略の時代の始まりの年です。このような時代に、山梨英和では「花の日」と呼ばれる行事が始められました。これはまことに象徴的で、意義深い事であると私は思います。

「花の日」の訪問という行事が始まったきっかけは、記録によれば次のようなものであるとされています。

その頃、何人もの英和生が日曜日毎にキリスト教会で子供達にイエス様の事や聖書を教えていたそうです。彼女達は子供から「生徒先生」と呼ばれました。英和の生徒が「生徒先生」として出会う子供達の多くは貧しく、普段は一日中幼い弟や妹達の子守りに明け暮れていたとあります。日曜日になるとその子供達が待ちかねるように教会にやって来た。中には真冬でも薄い着物を一枚しか着ていない子や、足袋も履けずに手や足が霜焼けで膨れ上がっている子供達もいたそうです。その事に英和の「生徒先生」達はとても心を痛め

ます。そして、ここがすごいところだと思うのですが、彼女達はこの子供達は一体何が原因でそんなに貧しいのかを調べたそうです。そしてその主な原因が両親の飲酒にあると知ると、校内に禁酒会を組織して活動を始めます。上級生のこうした活動をプレストン先生から聞いた下級生が自分達にも何かできることはないかと相談して、それでは自分達はご病気の方やご高齢の方達の所をお花を持ってお訪ねしようということになったそうです。おそらくそこには、キリスト教の宣教師であった先生方からのアドバイスがあったことなのでしょう。これが山梨英和の花の日の始まりであるとされています。

私はこのエピソードを知って大変感動し、またとても教えられました。感動したのは幼い子供達の貧しさに心を痛める生徒達の豊かな感受性に対してです。しかもそれをただ可愛そうという気持ちでは済まさないで、この子供達の貧しさの原因は何かを考えようとする洞察力と、それを調べる探求心、そしてその結果を踏まえて問題の克服のために実際に体を動かす行動力に関心しました。またこうした先輩の姿を見て、自分達も何か出来ることをしたいと心を燃やす下級生達の一途さにも大変心を打たれました。何と心優しく瑞々い感性をもった、頼もしい「生徒先生」達でしょうか。

おそらく、そんな「生徒先生」達の傍らには生徒達の思いを温かく見守り、支え、育てる先生方がおられたことでしょう。これがプレストン先生を始め多くの先生方が大切にされた、山梨英和の教育なのだと思えます。プレストン先生はとりわけ家庭問題に関心を寄せながら、教会のためにも精一杯働かれた先生であることを知る時、その思いはひとしお強まります。

こうした先生達に感化を受けた人々が山梨英和の歴史を切り開き、キリスト教会の宣教の業を豊かなものにされました。その一人に第3回の卒業生の雨宮しげさんがおられます。この方がプレストン先生に宛てて書かれた手紙にこのように記しておられます。

「父がやっと日曜日に（仕事を）休んでもよいと許可をくれました。（私は）いつも読書と聖書の勉強をしています。夕食の前に私がお祈りをすると、はじめ奉公人たちはげらげら笑っていましたが、今は全然笑いません。真剣に祈れば、神様から力を与えられるのです。朝ごとにマタイ福音書24章14節を読んでいます。すべての友人や隣人に福音を伝えることが、神様への義務であると信じます。」

「真剣に祈れば、神様から力を与えられる」「すべての人に福音を伝えることが、神様への義務である」。何とひたむきな言葉でしょうか。そう信じて、たとえ人から笑われても、祈る事を止めなかった若者がここにいます。こうした女性達、若者達が貧しい子供達のために心を痛め、考え、調べ、行動したのです。しか

もそれは日本が他国への軍事的な侵略へと雪崩を打って進んで行く帝国主義の時代の直中でのことなのです。その中で、ひたむきに聖書を読み、自分に何ができるかを考え、何をしなければならないのかを追い求めて、子供達やお年寄り、ご病気の方など、たくさんの痛みや苦しみを担っている人達のことを思って祈り、花を差し出す「花の日」の行事が始まった。このことを知って、私は、ここに、山梨英和が大切に守り抜かなければならない「建学の精神」があることを教えられます。

私は、ここで、一昨年の12月に亡くなった評論家の加藤周一が、随分前に書いた「小さな花」と題するエッセイの一節を思い出さずにはいられません。少し長いのですが、ご紹介したいと思います。

「どんな花が世界中でいちばん美しいだろうか。春の洛陽に咲く牡丹に非ず、宗匠が茶室に飾る一輪に非ず、ティロルの山の斜面をおおう秋草に非ず、オートゥ・プロヴァンスの野に匂うラヴァンドに非ず。

1960年代の後半に、アメリカのベトナム征伐に抗議してワシントンへ集まった「ヒッピーズ」が武装した兵隊の一行と対峙して、地面に座り込んだとき、その中の一人の若い女が、片手を伸ばし、目のまへの無表情な兵士に向かって差し出した一輪の小さな花ほど美しい花は、地上のどこにもなかったろう。その花は、サン・テックスの星の王子が愛した小さな薔薇である。またソロモンの栄華の極みにも匹敵したという野の花である。

一方には史上空前の武力があり、他方には無力な一人の女があった。一方にはアメリカ帝国の組織と合理的な計算があり、他方には無名の個人とその感情の自発性があった。権力対市民。自動小銃対小さな花。一方が他方を踏みにじるほど容易なことではない。

しかし人は小さな花を愛することはできるが、帝国を愛することはできない。花を踏みにじる権力は、愛することの可能性そのものを破壊するのである。そうして維持された富と力、法と秩序は、個人に何をもたらすだろうか。いくらかの物質的快楽と感覚的刺激の不断の追求と決して満たされない心のなかの空洞にすぎないだろう。いかなる知的操作も、合理的計算も、一度失われた愛する能力を、回復することはできない。

権力の側に立つか、小さな花の側に立つか、この世の中には撰ばなければならない時がある。たしかに花の命は短い、地上のいかなる帝国もまた、いつかは亡びる。天狼星の高みから人間の歴史の流れを見渡せば、野の百合の命も、ソロモンの王国の運命も、同じように現れては消えてゆく泡沫だろう。伝えられるところによれば、アメリカの俳優ピーター・フォーク氏は、日本国の天皇から招待されたときに、その晩には先約があるといって、断ったそうである。私は先約の相手に、友人か恋人か、一人のアメリカ市民を想像する。もしその想像が正しければ、彼は一国の権力機構の象徴よりも、彼の小さな花を扱ったのである。

私は私の選択が、巨大な権力の側ではなく、小さな花の側にあることを、望む。望みは常に実現されるとは、限らぬだろうが、武装し、威嚇し、瞞着し、買

収し、みずからを合理化するのに巧みな権力に対して、ただ人間の愛する能力を証言するためにのみ差し出された無名の花の命を、私は常に、かぎりなく美しく感じるのである。」

(初出「ミセス」1979『小さな花』かもがわ出版 2003)

日清戦争の開戦の年に山梨英和の「花の日」が始められたのは偶然かもしれませんが、しかしとても象徴的です。今、またパックス・アメリカーナと呼ばれる時代にあつて、私達は小さな花を差し出した、創立期の人々の祈りと志を持ち続けているかどうか。それが今、本当の意味での生きた伝統として山梨英和の中に、私達の息づき、根付いているかどうか、問われる思いがするからです。民主主義こそ平和の根幹であるとの思想によって制定された教育基本法を無惨にねじ曲げ、国家主義的な教育へと舵をきる新しい教育基本法を制定したこの国にあつて、人と人との対等の関わりをこの一点に固く立って考えることはとても大事なことです。

プレストン先生や山梨英和の生徒先生達を始め、多くの先輩が大切にされた、問題点をしっかりと見据えて調べ、的確にまとめ、勇気をもって発言し、行動する生きた学びを実践すること。しかもそれを巨大な権力の側ではなく、「小さな花の側に立つ」ことを常に心に刻んで、イエス・キリストにならう者として行うこと。それが今私達、山梨英和というキリストの学校に連なる者達に託されている、そしてその学校を支えるキリスト教会の使命ではないかと思えます。それが、この時代にあつて、本当に大切な「愛する能力を回復」させると信じます。

経済効率ばかりが重視されて、「愛が冷えていく」、格差が歴然とする社会にあつて、私達は、ただ一度の生涯を何にかけて行くのか。「不法がはびこるので、多くの人の愛が冷える」この時代にあつて、私達は本当に大事な事を祈り願い、追い求めて、当面するたくさん課題を乗り越える知恵と力を出し合いたいと思えます。

課題山積の苦しい時代ではあります。どんなに高い理想を掲げて、それを実践し、伝えるには、私達自身の知恵も力も足りません。そのために、生徒募集は実に厳しい状況にあります。しかし「み国の福音はあらゆる民への証しとして全世界に宣べ伝えられる」。「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」というイエス・キリストの恵みの約束に希望を置いて共に歩んで行きたく存じます。

山梨英和中学高校のチャペルのその名が刻まれているグリーンバンク先生は生徒にこう仰ったそうです。「他の人に差し出した手が傷つくときにだけ、私達の心は成長するのです」。傷つくことを恐れてはならない。傷ついた時にだけ分かること、傷ついた人にしかできない大切なことがある。山梨英和が依り立つキリスト教の信仰では、イエス・キリストが必ずやその傷ついた魂や心や関係を癒して下さいます。このことを心にしっかりと刻むために、この地で、礼拝を重んじるキリスト教教育を行って行きたいと思えます。

自分を見守る者があると信じる事がどんなに大きな